

神はわが砦

(詩編 46:2~4

ヨハネ 8:32)

詩篇記者は言っています。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」と。

では、彼が直面した苦難とはどのようなものであったのでしょうか。地が姿を変えます、山々が揺らいで海の中に移ります。また海の水が騒ぎ、沸き返り、その高ぶるさまに山々が震えます。全自然が揺れ動く様子、異常な状態を言っています。

日本にいる私たちは地震を経験しているので、この内容が実感できます。地震によって地盤が割れ、そして山が崩れる、海も山も揺らぐ恐ろしいものです。生きるか、死ぬか以外には考えられない恐怖の瞬間です。日常においては想像できないことですが考えられない、そのようなことが実際にあるのです。イスラエルにおいては、地と山は変わらないもの、揺らがないもの、と思われていました。ですから、そのようなことがあるということは、考えられない試練、あり得ない苦難を意味します。

詩篇記者はエルサレムが外敵によって飲み込まれそうな危機の中で、このような神様への信頼の賛美をささげているのです。変わらないものであり、揺らがないものであるこの大自然の地と山と海が変わり、揺らぐことがあっても、神が共におられる、神の都、エルサレムは守られるという信仰告白です。

皆様の中には年齢が高い方が多いですが、若い方であっても形は違っても、人生の旅路の中で思いもしなかった試練、死んでしまいたくなるような絶望の時間を味わった方がおられると思います。あらゆる手段を尽くしても無駄、もうどうしようもできない状況、耐えられないような試練があったかもしれない。あるいは、今そのような試練の中におられる方もいるかも知れない。しかし、私たちには避けどころ、砦があるので。

これは宗教改革者マルティン・ルター（1483-1546、ドイツ）が、作った賛美歌の歌詞で親しまれているものです。日本ではわがやぐら、長年歌われていましたが、賛美歌 21 では、わが砦になっています。

10月31日は宗教改革記念日です。1517年10月31日、現在のドイツのヴィッテンベルグ大学教授であったマルティン・ルターが、ヴィッテンベルグ城教会の門の前に「95か条の提題」を張り出した日です。聖職者たちの墮落と金銭集めを目的に教会が免罪符などの間違った教えをすることに、それは聖書の教えに反すると指摘した文であります。それがきっかけとなって、改革運動が全ヨーロッパに広まり、プロテスタント派としての教会を形成することになるのです。ルターが言った「聖書のみ」、「信仰のみ」、「万人祭司」（神の前ですべての人は平等である）という3大原理はプロテスタント教会に今も受け継がれています。ルターは聖書を自国語（ドイツ語）で翻訳して、司祭だけではなく、一般の人も読めるようにしました。また、ルターは、牧師と聖歌隊だけが歌っていた賛美歌を、会衆全員が歌えるようにし、多くの賛美歌を自身が作りました。賛美歌 377番 「神はわが砦」はルターの代表作であり、プロテスタント教会の宗教改革の行進曲のようなものです。

ルターの父は、農民出身でありましたが、鉱山業である程度の成功をした人です。生活に苦勞をした彼の父は、ルターに出世の道を選ぶよう要求していたようです。ルターは父親が願う通りに勉学に励み、優秀で将来が期待される学生でした。

しかし、皆さんも良くご存じであると思いますが、ある日、家を出て大学へ向かうとき、野原で激しい雷に会います。あまりにも激しい雷に死の恐怖に陥ったルターは「神様、助けてください。修道士になり

ますから！」と叫んだといひます。その神様との約束の通りに修道士になりますが、それに対する父親の失望感は大きなものであったようです。ルターは熱心に修道生活を送り、祈りを捧げ続けても心の平安が得ることができませんでした。禁欲的な生活の中で、あらゆる苦行と修業をしても罪から抜け出せない自分との戦いでした。その苦しみの中、使徒パウロが言った信仰によって義になるという言葉によって、救いの確信を持ち、平安を得ることができたのです。そこから「信仰義認」という神学思想が生まれました。彼の宗教改革の道はまさに地が変わり、山が動く中での歩みでした。命さえ危なくされる中で、彼は、詩篇記者のように 神はわが砦、と歌っているのです。

この世の全てが揺らぎ、崩れ落ちて、私には避けどころ、砦がある、それこそ、主イエス、キリストである、そのような信仰によって、彼は支えられ、守られて宗教改革の道を進むことができました。

主イエスキリスト、その真理は私たちを自由にします。罪から、そしてあらゆる試練と苦難の束縛と恐怖から、悩みから私たちを解き放してくださるのです。

11 節にこのように書かれています。

「力を捨てよ、知れ、私は神。

国々にあがめられ、この地であがめられる。」

私たちの力を捨てて、主の前に謙る時、神様が働いてくださるのです。私たちの力が尽き、無力を知った時こそ、主が働いてくださるのです。ですから、私たちの絶望は主によって希望になるのです。

私たちは苦難に出会うと、なんとか自分で解決しようともがきます。エルサレムの危機の中でエジプトに助けを求めよう、いやバビロンに求めようとする人たちがいました。神様に助けを求めるところから始まるのではなく、人間の力で解決しようと思ったのでした。しかし神様は言われます。助けはただ私のみである、ですから、自分の努力、自分の力を捨てて、わたしの元に立ち返りなさいと言われるのです。

神様はルターを通して、カトリックの教会が墮落と違反の罪から立ち返り、真理によって新しくされることを望んでおられたのです。しかし、頑なな心はルターを殺そうとしたのです。

この世の暗闇の力は、主によって生きる人を苦しめます。イエス様を十字架につけたのも、そのような人間の罪によるものでした。しかし、主は復活し、真の自由を、解放の道を与えてくださったのです。

主こそ、私たちの避けどころ、わたしたちの砦です。

全世界の試練、教会の試練、個人的な試練、その中に置かれている私たちに、主は聖書を通して言われます。わたしこそがあなたの避けどころ、砦である。必ず助けてあげる。

主によって罪が赦され、全ての恐れや不安から、悩みから解き放される皆さんと私でありますよう祈ります。